

ラドヤード・キプリング

27 三艘のオットセイ密猟船の唄

遠いニッポンという国でのこと
紙の灯りがともる酒場
異国の船乗りたちが飲みさわぐ
そこはブラッド・タウンのジョーの店
たまぐれ浜風が吹くときは
港のざわめきを運んでくる
横浜湾の引き潮は
ブイのそばを音たてて引いていく
そんなときシスコ甘露亭では
あきもせず蒸し返されるあの噂
人知れぬ海での人知れぬ喧嘩沙汰
バルティック号がノーザンライト号から逃げ
ストラルザンド号がその二艘と戦うあの話

さてここにロシアが鉛玉と刀で 目に物言わず法律がある
アリューシャンの霧深い海にやってきて オットセイを狩ってはならぬとの法律が
灰色の海が 海草の垂れ下がった岩棚を洗うところでは
毛皮を取るために青ギツネが繁殖し オットセイは自分らで子孫を増やす
雌オットセイが繁殖期ともなれば 手ごろな岸を求め 5
大きな雄オットセイは次から次へと吼えながら海から体を乗り出す
九月最初の疾風が 雄同士の雌をめぐる争いに水をさし
大きな雄オットセイは海へもぐり どこかへ姿を消してしまう
オットセイの繁殖地も砂丘も流氷も みなしんとして眠る
夜ともなればオーロラが舞い降りて 地吹雪とダンスを踊る 10
接岸する冰山や きしる流氷群を片付ける神は
小型キツネの鳴き声と雪原を渡る風の音を お聴きになる
女たちは着道楽 衣類に金を惜しまないので
年々歳々危険を冒してまで オットセイ船は密猟に出るのだ
ロシアのわき腹にしがみつくほど近づいて 猟をするのはイングランド人か日本人 15
ひょっとしてスコットランド人 でも一番たちの悪い盗賊はヤンキーだ

ノーザンライト号 ベーリング海へと向かう
右舷の荷役口からストーブの煙突を突き出し おまけに船首にロシア国旗
(バルティック ストラルザンド ノーザンライトの三艘は 同じ穴のむじなたち
ベーリング海へと こっそり忍び寄った) 20
ようやく砂浜のある入江に来てみれば そこにいたのはバルティック号
乗組員たちは上陸し 群がるオットセイを追い立て 撲殺し 皮を剥いていた
千五百頭分の生皮が ずらりと浜の上に並べられた
その時 ノーザンライト号が濃霧に包まれた 入江に入ってきた
バルティック号は船員を乗船させ 錨を上げた 逃げるが勝ちだ 25
濃霧の中では ノーザンライト号のストーブの煙突が 四インチ砲に見えたのだ
(獲物と船を失うのは死ほどつらく 悲しいことだ
おまけに密猟のかどで ウラジオストック港にしょっぴかれるのはなおさらだ)
バルティック号は旋回し ハリエニシダにウサギが隠れるように濃霧の中に身を隠した
ノーザンライト号はボートを降ろし 浜に並んだ盗品をそっくりいただいた 30
しかし荷を舷側につけるか 船倉のハッチをあけるやいなや
幽鬼のように真っ白な砲艦が 迫って来るのに気が付いた
砲艦は国旗を掲げ 黒々と直角に突き出す三門の大砲を見せた
砲艦の煙突はこびりついた塩で真っ白 だが煙は吐いていなかった

錨上げ機に水夫をつけるいとまもなく 鎖繋ぎピンを引きちぎり 35
ノーザンライト号は帆を蝶々開きで 外海に進路を取った
死刑よりつらいのは終身刑 ロシアの法律じゃ
水銀鋳で働かされ 毒で顎の骨から 歯がぼろぼろ抜けるのだ
岸から一マイルも進まぬうち 背後から砲撃の音を聞いたわけでもないのに
船長はしまったと膝をたたき 船を風上に旋回し停めた 40
「イカサマだ イカサマにひっかかったぜ トム・ホール様としたことが
「泥棒捕まえるにゃあ 泥棒にやらせろだ おれたちみんなはめられたぜ
「何に誓ってもいい
「帆に当たった風を受け流しているあの手は たしかルービン・ペインの手だ
「ペインの奴 ペンキや円材で船をこぎれいにし うまくごまかしやがった 45
「ここからでもストラルザンド号の特徴ある甲板室がよく見える
「やいペイン 貴様とはボルティモアで一回 ポストンで二回会ったが
「今日ここで出会ったが百年目
「こら若いの 俺たちのオットセイを 騙し取ろうとして
「派手な布で飾った煙突と 腐れ松材の大砲でおどしたって そうはいかんぞ 50
「ドラと汽笛でバルティック号を入江に呼び戻せ

「こっちも張ろうじゃないか カード二組のイカサマポーカーで」

ノーザンライト号は オットセイ密猟人のドラと汽笛を鳴らして
バルティック号を濃霧の中から呼びもどした こちらもだまされ頭にきていた
白波あわ立つ海を再度入江に向かって 手探りするように進んで行った 55
やがてストラルザンド号の帆桁がきしり もやい鎖の鳴る音がした
味方はベルトに拳銃をさし もやい柱やボートの陰に隠れた
「やいルービン・ペイン 生皮のために戦うか 仲良く分けるかどうかする

ルービン・ペインは歯をむき出して笑い 皮はぎナイフの鞘をはらった
「いいとも 目には目皮には皮だ 命のためなら惜しいものはなにもないのだ 60
「おれの船倉にゃ 江戸の港に運ぶ六千枚の毛皮があるんだ
「それに北緯五十三度以北にゃ 神や人間の掟などあるもんか
「だからおとなしく空っぽの船倉のまま 獲物のいない海へ出ていきな
「お前さんの獲物はこっちがもらった それくらい俺だって獲れるが

それに答えたのは撃鉄のカチリという音と 銃の台尻を滑らすきしり音 65
しかし情けを知った霧は 十重二十重と 彼らの悪行を隠し
むせびなく霧は 十重二十重と 男たちの怒りを覆い隠した
青白い弾丸の火花が船の手すりを走り オットセイ狩用のライフルが火を吹いた
弾丸が肋材や横板に命中し 木っ端が飛び散った

(オットセイを射止めるには散弾銃じゃラチがあかないのだ) 70
濃い硝煙があたりにたちこめ 鉛のように重く 青々と動かなかった

バルティックの甲板に三人 ストラルザンドでは二人が倒れた
腕を伸ばしたその先はどこもかしこも霧で男たちは身動き取れず
うめき声や言葉を聞けば それに向かって発砲する
「神様」と誰かが祈ると 仲間はその音を黙らせなくてはならぬ 75
探るような一斉射撃で二人を狙い それで二人は永遠におし黙る
一人が異教の神の名を叫ぶと 一人はマリヤ様と叫ぶ
するとおびたしい数の弾丸が 声の方向に飛んでいく

相手の出方を待つ沈黙の間 下方で舵が泣くような音を立てる
めいめいが食いしばった歯の間から 油断なく息を吸い込む 80
引き金と耳と目をピンとおっ立て 眉根を引き寄せロー文字
足を歯止めや綱止めにつけてしっかりと踏ん張り 船の横揺れに耐えた
やがて濃霧の中息をつこうと 負傷した水夫の咳が聞こえた
やがて死を目前に嘆く ルービン・ペインの苦痛の音が聞こえた

「ファンディ・レースの潮流には もう俺は行けない 85
「潮が満ちてくる干潟から 野ブタがあわてふためき 海岸めがけて走るのも見られない
「バス・ロックの南の漁場を漂う トロール船も見ることはあるまい
「堂々たるフォール川連絡船の明かりが ロングアイランド砂州を照らすのも
「悲しいぜ、こんな淋しい海で、やくざな喧嘩でおっ死ぬとは
「でも掟というものがあるんなら トム・ホール 貴様も縛り首だ 90

トム・ホールは後甲板の手すりに突っ立ち叫んだ 「縛り首たあ 貴様のこった
「北緯五十三度以北にや 掟もへったくれもあるものか
「悪行を重ねた娑婆におさらばして しおらしく神様のところへいきな
「お前のなじんだ女たちは 見つかるかぎりこの俺様が面倒見てやるからな
ストラルザンド号の一人 縁起悪いフィンランド野郎がやみくもにぶっぱなした 95
それがトム・ホールの膝の手のひらの幅ほど上に命中した
トム・ホールは帆綱につかまり よろよろ倒れ悪態をついた
「やい ルーベ ちょっと待て 死神の奴がお二人さんでどうぞときたぜ
「死神はおれたちをこの潮に乗せ 獵場に連れていくのだとよ
「若い雄のオットセイみたいに 神の怒りの前に連れていくのだとよ 100
「ものども ピストルをしまえ ライフルを置け
「精いっぱい戦って親方たちは倒れた 喧嘩はやめて 死のうじゃないか
「撃ち方やめい 舳先の奴 バルティック号の乗組員よ みんな手を引け
「おれとルーベみたいに地獄行きだぞ おれたち二人がくたばるまで待て

二艘の船の間はしーんとして声もなく 濃い早瀬のような生血がゴボゴボと 105
空から落ちる霧雨とともに甲板に流れた
うねりが両船を引き寄せ、船べりと 船べりがぶつかりあった
舷側の木材がどしんとぶつかり離れたりする音のみで 人の声はさらになし

やがてルービン・ペインは いまわはの時 声を絞りだした
「三十年も海にいて 最後はこんな暗いところで死ぬのか 110
「ケチなペテンで こんなところで俺様をお陀仏にさせる船乗り稼業なんぞくそくらえ
「おまんまを稼ぐ所で得たものはこのざまだ でもおめおめとは死なんぞ
「くそ忌々しい霧の奴め いつもの風は一体どこだ
「おれの胸にたまったこのくすぶりを吹き払い 青空を見せてくれる風はないのか」
霧は願いを聞いて ちぎれ帆のように左右にが晴れ 115
もやの中に北極海のにせ太陽と 岸に寝そべるオットセイが見えた
細い砂州と入江が銀灰色を帯び そこに向かって鋼色の潮が打ち寄せていた
船乗りたちはその明るみの中顔を引きつらせ顔面蒼白で眺めていた

甲板を洗いあたりにあふれ広がった血だまりが 虹のように輝いた
きれいな金色の空葉莢が 放置された死体の間にころころ転がった 120
死体は酔っ払ったように 甲板を風上 風下に転がった
船乗りたちは自らの手で招いた惨劇を眺めた よく見よと神が命ずるがままに

微風が手すり越しに吹き 船首の縦帆を膨らませた
でもだれも舵や帆綱につこうとはせず スクナー船は波間を漂った
ルービンののどがごろごろ鳴り 一声叫んで魂を捨てた 125
「くたばったか」トム・ホールは言った 「こんどは俺の番だ」と
そのまぶたは死の深い眠りを前に重く ひたすら帰港を希った
傷口を手で押さえ 夢見心地に喋った

「太陽と逆方向だから 東風は役にたたねえ
「甲板を洗え 血だらけだ オットセイの毛皮を分けあつてずらかれ 130
「獲物はバルティック ストラルザンド ノーザンライトで公平に分けよ
「トルストイ岬に近づくとロシアの監視船に会うぞ でもトム・ホールはもういない
「俺は沿岸部ではケチな悪行を重ね 公海ではもっとでっかい罪を犯した
「でももう当直や舵輪当番にはあきあきした おれはもう寝るよ
「ひどい目にあわせやがった海なんぞ もうたくさんだ 135
「若い雄オットセイがいる猟場で休むとしよう
「西に向かいそれから南へ 霧が晴れる方へ行け
「日本に着いたら吉原の女たちに俺のため線香の一本も上げるよう伝えてくれ
「おれの脚を持ち 舷側から投げ込んで水葬にするなよ
「どこかの岸の砂穴に ベーリング様みたいに埋めてくれ 140
「この喧嘩がフェアなものだったと知っている ルービンにも場所も空けてやってくれ
「そして二人きりにして語り合わせてくれ もう一度」

太陽が隠れて見えない だから出力半分で勤と動索で探って進め
霧から霧へ 運と計器を頼りに ベーリングがやったように進め
もし明るくなって陸地が見えたら 145
その島の北西にある岬に十字架を二本立ててくれ
その先の入江への良い目印になり 向こう見ずの密猟者に教えるだろう
いつ傷だらけの雄のオットセイが すべすべしたハーレムの雌を連れてくるかを
そこでは絶えず流氷が割れ 雄鯨が潮を噴き上げる音が聞こえるだろう
どんな風よりも大きく オットセイの吼え声が遙か沖合からも聞こえるだろう 150
そこでは絶えず、雷鳴とどろく暴風雨が呼ぶ厳冬がひかえ
そこから北方にセント・ジョージが 西方にセント・ポールの島影が見えるだろう

そこではオットセイの群に出くわすだろう
荒涼たる岬の沖合に 年々歳々危険を冒し密猟船が往来するのだ
いまもなお横浜じゃ 語り継がれている
人知れぬ海と人知れぬ喧嘩沙汰
バルティック号がノーザンライト号から逃げ
ストラルザンド号がその二艘と戦うあの話

155

(榊井幹生訳)